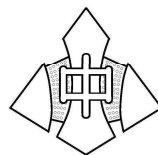


手をたずさえて

“KOHARADA WAY” 自分に打ちかて

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和2年6月12日(金) 発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

学校再開第3週目終了! 今週から部活動も再開!!

今週から部活動等の放課後の活動が再開しました。放課後の校庭、校舎内、体育館にも、生徒達の日常が戻り始めました。部活動においては、活動初日にミーティングが行われ、とにかく無理をせず徐々に心と身体を慣らしていくこと、手洗い・換気等の感染症対策と水分補給等の熱中症対策をしっかり行うことなどが確認されました。

昇降口の情報掲示板

校長先生 からの 宿題より

コロナウイルスでの休業期間中は毎日テレビを見ていました。感染者が都心を中心に増加していること。病院で院内感染がおきていること。高齢者の方々が亡くなっていること。世界全体が苦しい状況だということ。そして、今緊急事態宣言が解除されたこと。

私はこれらのニュースを見て、いかに「あたりまえの生活」が大切であるかを考えさせられました。学校に行けなくなって、友達と会えない日々が続く、大好きな部活もできなくなって、「コロナウイルスがなかったら、今、私はきっと受験に向けてクラスみんなと勉強していただろうし、部活の仲間と最後の大会で素晴らしい思い出を作っていたのに」と思う日もありました。でも私はこう思います。

「コロナウイルスのおかげで、たくさんのことを学ぶことができた」と。

学校の大切さ、友達の大切さ、スポーツの大切さ、行事の大切さ。

この休業中に感じたことは、これから成長していく上で大切なことだと思います。これからどうなるかわかりませんが、「あたりまえの生活」を一日一日充実したものにしてできるようがんばりたいと思います。

(3年女子 M・Kさん)

『校長先生からの宿題』を今読んでいます。なるほどと思う考えがたくさんあります。学校生活に活気と潤いを生み出すためのアイデアとともに、今後このような形で紹介していきたいと考えています。

目標となる大会やコンクール等が中止になったり、代替大会の実施も未定だったりする中での再開ですが、仲間と、そして先輩や後輩と共に過ごせる時間を大切にしたいと思っています。

M・Kさん(『校長先生からの宿題』より)のように前向きな考え方ができれば、きっと未来を変えていくことができると思います。

「あたりまえの生活」の大切さなど、「このような状況だからこそ実感できること」を大事に大事にしてほしいのです。

今回部活動ではない別な目標を設定し、歩み始めた3年生もいます。今後、7月末を待たずに部活動を引退する3年生も出てくると思います。それもひとつの道です。考え抜いて出した結論であり、周りでどうこう言うことはできないことです。自ら選んだ部活動とは別のステージにおいて、前向きな気持ちでの頑張りを期待しています。



ミーティング (女子卓球)



再開初日の練習 (女子テニス)

起き上がり小法師のように...



美術室廊下の展示物の中に、石井先生バージョンの「起き上がり小法師」があります。会津で最も古い(約400年前)民芸品と言われ、「転んでも転んでも起き上がる」という願いが込められた縁起物です。見てみると心が和むと同時に、小法師の“七転八起”の精神にあやかりたいと思う今日この頃です。

No.8から紹介し始めた『自己肯定感を育もう』シリーズについて、今回は別紙にて、第2号を紹介します。是非読んでください。



生存率99・8%「釜石の奇跡」～「津波てんでんこ」の教えの正しさ

千年に一度の超巨大津波に襲われた東日本大震災。被災地の調査を続ける中で、常々思い知らされるのは「津波てんでんこ」の教えの正しさだ。「てんでんこ」とは各自のこと。海岸で大きな揺れを感じたときは、津波が来るから肉親にもかまわず、各自てんでんばらばらに一刻も早く高台に逃げて、自分の命を守れ！という意味だ。この教訓に基づき、片田敏孝群馬大教授（災害社会工学）の指導で津波からの避難訓練を8年間重ねてきた岩手県釜石市内の小中学校では、全児童・生徒計約3千人が即座に避難。生存率99・8%という素晴らしい成果を挙げて『釜石の奇跡』と呼ばれた。

同市北部に位置する鵜住居（うのすまい）町の海岸線から約800メートル、海拔約3メートルの川沿いの低地に並んで建っていた釜石東中学校と鵜住居小学校の事例を見てみよう。

平成23年3月11日。午後2時46分に東日本大震災が発生すると、釜石東中の副校長は教室から校庭に出始めた生徒たちに、「（避難所へ）走れ！」「点呼など取らなくていいから」と大声で叫んだ。そして若い教職員に、率先避難者となって生徒たちと避難所へ走るよう指示。避難所は約700メートル南西の福祉施設で、所在地は訓練で全生徒に周知していた。

当初、一部の生徒は走らず、校庭に整列しようとしたが、副校長らは懸命に「逃げろ」「走れ」と指示。そのため全員が校門を出て、避難所へと駆けだした。一方、鵜住居小は耐震補強が終わったばかりの鉄筋コンクリート造り3階建ての校舎で、雪も降っていたことから、当初は児童を3階に集めようとしていた。しかし、「津波が来るぞ」と叫びながら走っていく中学生らを見て、教職員は避難所行きを即断。小学生も一斉に高台へ走り出した。このとき、鵜住居小には保護者数人が児童を引き取りに来ていた。教職員は児童を避難させたことを説明し、一緒に避難することを勧めたが、1人は児童をつれて帰宅し、津波の犠牲になってしまったという。

避難した小中学生約600人は、標高約10メートルの福祉施設に到着したが、裏手の崖が崩れそうになっていたため、中学生らがもっと高台への移動を提案。さらに約400メートル離れた標高30メートルの介護施設へ、小学生の手を引きながら避難した。この直後、津波遡上（そじょう）高は20メートルに達し、福祉施設は水没。「津波てんでんこ」の教訓と、防災意識の高い中学生の冷静な状況判断が、多くの命を間一髪で見事に救う結果となった。

～『産経ニュース』からの引用～



震災時の避難の様子

我々も経験した東日本大震災、その後も地震では、大分県中部地震（2016）、大阪北部地震（2018）、北海道胆振東部地震（2018）が発生しています。そして、記憶にも新しい自然災害では、昨年度の台風15号による被害、さらには本校学区も含め多数の河川が氾濫・決壊、甚大な被害をもたらした台風19号など、自然災害について「いつ何が起ころのか」予測がつかない今、避難訓練の持つ意味には大きいものがあります。

生徒のみんなは、今日の避難訓練にどんな気持ちで臨みましたか？

避難の形には様々なものがあります。今回は避難経路の確認をねらいとしましたが、もう一つ大切なことは、防災に対する考えを自分の中にしっかりと持つための時間であるということです。実際に災害が発生し、学校で避難指示が出されたら、どう行動すべきかを思い浮かべてみてください。イメージできますか？（中略）

最後に、今日みんなに伝えたいことは次のことです。

この『釜石の奇跡』において、この「奇跡」を支えたのは、古くから伝えられてきた先人の教えと日常の徹底した避難訓練であったこと。そして、みんなと同じ中学生のとっさの判断と迅速な行動が、小学生や地域の人々をも動かしたところが特筆



釜石での防災学習の様子

すべき点であります。それらを踏まえて、決して訓練をおろそかにしてはいけないということ、さらには、「いざ」という時の具体的な行動を頭の中にイメージして生活できるようにすることが大切なことです。

～「避難訓練」（6/12）講話資料～



釜石の中学校での避難訓練